助け合いの仕組み

学校法人神戸女学院　神戸女学院中学部３年　　宮　雅青

昨年三月に突然始まった休校期間。学校行事の中止や友人と会えない日々に不満が募った。しかし、良い変化もたくさんあった。暇になった私は、普段はあまりできない部屋の片付けや読書をしたり、新たな趣味に打ち込むこともできた。中でも、社会への関心が高まったことが、一番有意義な変化だった。新聞やニュース番組を毎日チェックするようになった私は、これまで社会についていかに無知だったか思い知らされた。社会問題や様々な人の価値観に触れ、新しい知識も増えた。また、自分自身や将来について考え始めるきっかけにもなった。

社会について新たに知っていく中で、税金に関する認識も大きく変わった。これまでは、納税をすることで自分に様々な公共サービスが返ってくるのだなというくらいにしか考えたことがなかった。しかし、昨年四月に緊急事態宣言が発令され、娯楽施設や百貨店が軒並み休業した。そして、休業要請を出している政府が、休業した施設へ協力金を支払っていると知った。協力金は国の財源から支払われるため、税金が使われていることになる。調べてみると、失業者や生活困窮者の支援、受刑者の生活にも税金が使われていることが分かった。私は、税金は皆の助け合いの仕組みだということに気付いた。多くの人が一生懸命働き、定められた額に応じて皆から集められた税金が、年金や医療保険などの様々な形となって、巡り巡って日本国民の安全な生活を守っている。この助け合いの仕組みがあるからこそ、民主主義で競争社会の日本が成り立っているのだと感じた。だから、納税は国民の三大義務の一つなのだと思う。一見、義務と聞くと、強いられているようなマイナスで固苦しいイメージを持ってしまう。確かに、世間にはお金を搾取されていると考える人も少なからずいるだろう。しかし、大きな視点で捉えると、そのイメージも変わってくるのではないか。例えば、まだ中学生の私が、失業者やお年寄り、立場の弱い方々の生活を改善したり、直接お手伝いをすることは困難だ。でも、私が昨日買った赤ペンに対する一円の税金もどこかで困っている人の役に立つのかもしれないと考えるだけで嬉しく思うし、親しみやすく穏和なイメージとなる。

税金への認識が変わったことで、税金が日常生活にいかに身近なものなのか、選挙での意思表示がいかに大切なのかといったことも痛感できた。また、市立図書館で借りた本を今まで以上に大切に使ったり、公園で水が流しっぱなしになっていたら止めたりするようにもなった。今思えば、自分に返ってくるという認識はあまりに単純で自己中心的だった。これから、もっともっと社会について詳しく正しく学び、物事を多面的に捉える力をつけたい。そして、しっかり働いて納税をして、社会に少しでも貢献できる大人になりたい。